



発行：NPO 法人岡崎がくどうの会

【TEL&FAX】0564-32-0325

【E-Mail】okazakigakudou@yahoo.co.jp

【吉川 美里（なかよしクラブ 常勤専任指導員）】

●参加講座テーマ・保護者に生活をつたえ、かんがえあう

保護者に伝え考え合う…このテーマに関しては、今もこれで良かったのか？もっと出来ることがあったはずでは？等葛藤の毎日です。本当は、この子を大切に思っている・考えているということを伝えたいのですが、保護者の気持ちを考えると、ためらってしまったり考えすぎてしまうことがあります。指導員の思いを伝えること自体も難しさを感じていますが、更により良く伝え合うにはどうしたら良いか？ということも、大切であり課題でもあると日々感じています。

初めの実践報告で、子ども一人一人の気持ちに寄り添ったとても丁寧な保育をされている事例があり、保育や保護者の方々への対応等たくさんのことを学ばせていただきました。伝え合うには？ということ考えた時、日常の何気ない会話を大切にしていきたいと思っていますが、この子は本当はこういう思いがあったからこうしたんじゃないか？という“思い”も伝えられるようにしていきたいと考えています。先生の話聞いていて、伝え方にマニュアルはなく指導員それぞれ特性も違いますが、“気になることは少なめに、良いところ・頑張っている所を多めに”の基本を心がけてコミュニケーションの努力をしていこうと思いました。まずは“保護者の思いを受け止めること”がコミュニケーションの第1歩。その上で“一緒に子育てしていきましょうね”という思いが伝わるよう努力していきたいです。全体会の講座と少し重なる部分もあり、この講座でも子どもの権利条約を理解した上の保育の大切さを学びました。体罰禁止法に関しても、体罰せざるを得なくなった親の気持ちを考えること、どうしたら良いか？一緒に考えられると良い、などと その先にあるものに気づいていく大切さに改めて気づかされました。

グループワークでは残念ながらあまり時間はありませんでしたが、どの地域の指導員もお便りや保護者会など同じような方法で保護者に伝えようと努力されていました。コロナの影響で更に難しくなってしまったということも共通の課題でしたが、やれることから少しずつやっていこうと思いました。日々保護者の方と話す何気ない会話から、指導員の知らない子どもの色々な姿を知ることはとても大切なことだと感じています。子どもの気持ちの奥にあるものを理解できるよう丁寧に保育し、保護者の気持ちの受容・共感。そこから伝え合う・考え合うことに繋げていけるよう、指導員同士協力していきたいです。

【平林 畔従代（あおぞらクラブ 非常勤指導員）】

●参加講座テーマ・高学年をふくむ学童保育の生活

今回の講座は、中津川市東学童保育所の実践報告を聞く機会が設けられていました。高学年の男の子が、1年生の男の子にコマ遊びが上手になる方法を分かりやすく教えたり、指導員では話が聞けないとき、6年生の女の子がケンカの原因を聞いてくれたりと、やっぱり高学年は小さな指導員だなあと考えていました。また、どの学童保育所にも、低学年と遊べるけど、まだまだ指導員と遊びたがったり、気が済むまで話を聞いてほしいけどうまく言葉に出せなかったり、素直になれない高学年もいてみんな少しずつ揺れながら成長していくのだと思い、微笑ましくなりました。

助言者の折出健二さんが、子どもの話を聞き、一緒に乗り越えていくことが大切だとおっしゃられていました。その際「YES→BUT→SO」、まず肯定して次の目当てを伝えることを意識すると良い、と教えていただきました。今後、子どもたちの話を聞く際、「違うよ」といきなり否定をするのではなく、まず子どもの考えをしっかりと聞いて受け止めてから、その子どもにとっての目標や改善していくことを伝えていきたいと思いました。加えて、子どもだけに関わらず、「YES→BUT→SO」の考えは、指導員同士でもとても重要だと感じます。保育に対して、指導員もいろいろな価値観を持っています。やり方を否定するのではなく、こんな風に考えることも出来るんだ、と思いながら自分の保育をより良い保育にしていきたいと思っています。指導員同士の関わり、日々の日常生活で「YES→BUT→SO」を実践していきたいと思っています。

【上野 佳菜（たけのこクラブ 非常勤指導員）】

●参加講座テーマ・学童保育と作業療法士の連携

今回の講義を受け作業療法士という学童保育指導員とは違う目線からの考えを聴きとても勉強になりました。子ども達のやりたいことを引き出し、できることが増えるようにサポートすることで、自信が付き自己肯定感が養われるのだと思いました。

大人が子どもにして欲しいことが必ずしも子どもにとって良い結果に働くばかりではなく、子ども自身のやりたいことを優先してあげることが大切だと学びました。苦手なことを、大人から押し付けられ仕方なく行動に移しても、なかなか思うようにできない。そこで自信を無くしてしまうといったことがあるそうです。

なので、苦手なことはできるだけ周りでサポートをし、子どもの得意なところを伸ばしてあげられるようにまた、関わることでできる指導員になりたいと思いました。さらに、幼少期の「遊び」というのは感覚を養う上で非常に大切な役割を持っているということも学びました。

一件ただの遊びやゲームに見えても子ども達には楽しく、無意識のうちに身体的、精神的に学ぶことのできるかけがえのないものです。

大人としては、どうしても勉強の方を優先させてしまいたくなりますが「遊び」も大切な学習だということを考え、一緒に遊ぶ時間も大切にしていきたいと思いました。

さらに様々な遊びに触れることで、子ども達が自分の新しい得意なことを発見することが出来るきっかけになると思います。

学童というたくさんの玩具や広いスペース、何よりたくさんの友達が揃う場所は「遊び」を養うには「最適な場」であると思うので、これらを活かせるような保育を心がけ、子ども達と関わっていけたらと感じました。

【石川 裕介（つくしクラブ 非常勤指導員）】

●参加講座テーマ・学童保育の役割と指導員の仕事

指導員が子どもたちの安全を守ることも大事ですが、子どもたち自身が危険を回避できるようになるのも大事だということを杉谷先生のお話で再認識しました。今までの私は机に座っている子を見ると「机に座らないで。」と注意していました。しかし、その子が自分で危険を回避できるように考えさせる声かけはなんだろうかと考えると、「机に座ると何が危ないと思う？」という声かけの方がよりいいと思います。子どもへの注意の仕方全体に言えることですが、ルールで決まっているから、駄目だと注意するのでは説得力がないので、何が危ないかをちゃんと指導員が認識した上で子どもたちに考えさせ、また、一緒に考えていくということも大事なことだと思いました。それから、杉谷先生の「一歩踏み出す。」という言葉に少し勇気を貰えました。今までの私は子どもに対して、受け身の姿勢で、一緒に遊ぶというよりも遊んでもらっているという感じでした。ただ、そのような受け身の姿勢では、子どもたちと一歩踏み込んだ関係になることは難しいなと以前から感じていました。そんな意気地なしの自分の言い訳として「子どもたちとは一定の距離を置いて、危ないことをしないように冷静に見ていなければならない。」と思い込むことで、子どもたちを温かく迎えるという姿勢がおろそかになっていたように思います。実際、杉谷先生のお話を聞くまでの私は私自身を子どもたちに対してどのように見せるべきかと自意識過剰になっていました。なので、子供たちがどんな表情で、どんな話をしているのかしっかり聴いてあげることができていなかったのだと思います。「一歩踏み出す」少しの勇気を持って子どもたちにちょっとした声かけを試してみる。例えば、最近した子どもたちへの声かけはこういうものがありました。もともと3人の子に誘われてカードゲームをしていた私が退屈そうにしている一人の男の子に「一緒にやろう。」と言ってあげるとその子は「いいよ。」と言って元気を取り戻した様子でその後楽しそうにカードゲームに興じていました。このように自分から一歩踏み出して声かけしてあげていると相手の子も私に対して、少し心を開いて話をしてくれるような実感も確かにあります。ある日、自分から「卓球やろう。」と誘ってあげた子が次の日、その子から自分の家族のことについて色々話してくれるようになりました。自分から心のガードを取り除けて、気負わず、真面目になりすぎず、笑顔で声かけしてあげていたら、こころなしか今までぼやけていた子どもたちの表情がだんだんクリアに見えてきたように感じています。今まで「ぼやけた一塊の集団としての子どもたち」に対して言っていた「ただいま」や「おかえり」も温かく一人ひとりに向かって言ってあげられるようになってきたかなと思います。コロナ禍で今まで以上に不安を感じている子どもたちに安心できる場所を作ってあげられるように、これからもユーモアを忘れずに、「一歩踏み出す」少しの勇気を持ちながら、子どもたちと生活していきたいです。